

# たまごの

第148号

令和4年3月1日発行  
発行所  
長崎大学玉園同窓会  
〒850-0029  
長崎市八百屋町36番地  
☎095-824-5494  
発行人  
濱崎嘉一郎  
(株)昭和堂

## 刻む



玉園同窓会副会長

池田 浩

幼いころ市場は遊び場の一つだった。「黙って盗ったら泥棒よ」山積みされたチリメンじゃこを摘まみ食いした私に女将さんが投げた言葉である。悪いことをしたら叱られる。必ず誰かが見ている。幼い心に刻まれた。

「よくあいさつをする、一粒も米粒を残さず食べる、あなたの取り柄たい」母がいつもかけてくれた言葉である。自分にも褒められるところがある。自分なりに心に刻んだ。  
貧乏を辱める言葉を平気で吐く教師がいた。「貧乏がなぜ悪い」唇をかみしめながらその言葉を見つめた。人を差別してはならない。この教師

から学び、心に刻み付けた。

朝の健康観察で熱発を見抜かれ担任から帰宅するよう諭された友達がいた。「帰りたくない。帰れば今日一日この学級での楽しさをなくす」と泣きながら訴えた。教師とはいい職だなあ、こんな職についたら。自分なりの夢を心に刻んだ。

人は様々な出会いを刻みながら成長していく。学校は、限られた学校教育の中ではあるが次代を生きる子供たちのためにその基盤となる知性や感性を磨き、刻み付けていく場である。それが意図的、無意図的であっても、様々な出会いや繰り返しの中で生涯を生き抜く力を心と体に刻み付けていく。

思い返してみると受けた授業の内容の大部分は記憶の縁から零れ落ち

ている。しかし、時に忘れていたはずの知識や言葉が、恩師や級友の顔から蘇ってくる時がある。刻み付けられた魂、生きる知恵はいくつになっても色褪せることなく生き続ける。特に教師が熱をもって真剣に子供たちに向かった言葉、何としても理解させたいと必死になった授業は、それぞれの子供の中に刻まれる。拙い指導力しかない新米教師が子供たちにとって忘れ難い先生としてあるのはその真剣さと熱情故かもしれない。教師は年齢に関わりなく謙虚に我が身を振り返り、自身が発する言葉、感情の揺れにも敏感な者でなければならぬ。己の指導力、研鑽のなさを棚に上げ、子供を指さす傲慢な教師から子供たちに何が刻まれるのだろうか。

今後10数年で米国の半数近い仕事自動化され、多くの子供が小学校入学時には存在していなかった職に就くと言われている。今ある多くの職が自動化機械化され、やがて淘汰されていくことになるのだろう。しかし、そうした時代の変化の中にあつて教師という職はなくなるのだろうか。AIは膨大な情報を瞬時に処理し、より効率的、効果的な学習の場を用意することができ。個々の能力、つまずきに応じたきめ細かな適切な指導も期待できるかもしれない。また、次代を生きる子供たちに

とつてこうした機器を活用し処理できる能力は必須のものとなっていくだろう。しかしAIが自ら志をもつて困難な課題に向かったりその達成を喜び認め合ったりするか、他を思いやり自らの幸福と重ね合わせながら取り組むことはできない。技術がどのように進展しようとも社会が背負う様々な困難な課題に向き合いより良い社会を構築していこうと志向するのは人である。

「教えるとは希望を語ることであり、学ぶとは誠実を胸に刻むことであり」(ルイ・アラゴン)。自らの至らなさを自覚するが故に学び高めようとする教師の姿に子供たちは触発され自分の夢に向かおうとする。誠実さを持つ教師のもとに謙虚に自らを磨き、学び続けようとする子供が育つのではないか。

子供の目を甘く見てはならない。教師の発する言葉を、動きを常に見ている、そして刻んでいる。

教師の働き方改革が叫ばれている。大切な動きである。その一方で教師とはどのような職なのか、その責任と役割は何かの、改めての問いかけも必要ではないか。なぜ教師という職が必要なのか、答えを出していくのは教師自身である。

願いを込め祈りを込めた授業、子供の心に希望や誠実に生きる種子を刻む指導はいつの時代も求め続けられなければならないと思う。



# 新学習指導要領の具現化 プログラミング教育

## 体験と試行錯誤のプログラミング教育



長与町立長与南小学校長

鳥山 勝美

令和2年度から小学校のプログラミング教育が必修化となりました。長与町の小学校ではそれに先駆けて令和元年度からプログラミング教育に取り組んでいます。現在は学習指導要領で例示されている算数科や理科の中でも実施しています。

そこで、本稿では令和元年度から6年生を対象に実施している「車型ロボットの自動運転」に挑戦する学習活動についてご紹介します。

小学校段階のプログラミング教育のねらいは、

- ① プログラミング的思考を育むこと
- ② プログラミングの働きやよさ、情報社会がコンピュータをはじめとする情報技術によって支えられていることなどに気付き、身近な問題の解

決に主体的に取り組む態度やコンピュータ等を上手に活用してよりよい社会を築いていこうとする態度などを育むこと

③ 各教科等の内容を指導する中で実施する場合には各教科等での学びをより確実なものとする

このねらいを実現するためには、学習指導要領が示すとおり、児童がプログラミングを体験し、自らが意図する動きを実現するための試行錯誤が極めて重要です。そしてその前提として、プログラミングの楽しさや面白さ、達成感を味わわせることは不可欠であると考え、そのための題材として、「車型ロボットの自動運転」に挑戦するという学習活動を考えました。

しかし、「車型ロボット」は高価で、各学校の予算での購入は困難です。そこで、長与町教育委員会が必ず要数を購入し、町内すべての6年生が体験できるようにしています。学

級単位で「プログラミング学習デー」を設定し、1日かけて「車型ロボットの自動運転」に挑戦させています。

まず、児童は、担任による自動運転のデモンストレーションを観察し、前進や停止、方向転換等がプログラミングによって行われていることを確認し、基本的なプログラミングの手順を学びます。ブロック型プログラミング言語を用いたソフトウェアをタブレット端末で直観的に操作できるので、児童は比較的容易にプログラムを組むことができます。

次に、児童は、3人一組のグループで、前進や停止、時間や障害物との距離や色を感知して止まったり方向転換したりする等の基本的な動作や、それらを組み合わせで指定されたコースに従って適切に動作するプログラミングに挑戦します。ここでは、指示したとおりに車型ロボットが動くことを実感させ、意図したとおりに動かない場合に試行錯誤を繰り返すことが重要です。それが先に述べたプログラミング教育のねらいの①②に繋がります。

児童は、自動運転のプログラミングに熱中し、車型ロボットの動作に一喜一憂します。課題があればグループでプログラミングを確かめたり組み直したりと試行錯誤を繰り返します。その後の成功の喜びは格別で、次の

プログラミングへの意欲に繋がっていました。また、他のグループとの交流の中で、意図する動きを再現するプログラムは一つではないことに気付いたり、さらによりよい動作を目指したりする姿も見られました。学習後の児童の感想には、プログラムを組むことの楽しさや面白さ、仲間との協働的な学びのよさ、試行錯誤することの大切さを実感したものが多くありました。

小学校のプログラミング教育の必修化は、児童に情報活用能力とともにプログラミング的思考を身に付けさせることを目指したものです。これらは、情報化の進展により社会や人々の生活が大きく変化し、将来の予測が難しい社会において、児童たちが将来どのような職業に就くとしても不可欠な力です。今回ご紹介した「車型ロボットの自動運転」のプログラミング体験は、児童にプログラミング的思考を育むために有効だと自負しておりますが、「総合的な学習の時間」で取り扱っている点から見ると課題があります。プログラミングを体験することが「総合的な学習の時間」における探究的な学習の過程に適切に位置付くよう今後改善を図るとともに、各教科等におけるプログラミング教育のさらなる充実も図っていきたいと思います。



## プログラミング教育の成果と課題



長崎市立西北小学校

江副 和生

います。

私は長崎市教育研究所研究推進員として、情報教育及びプログラミング教育の推進に関わってきました。

初めてのプログラミング教育についての授業実践を依頼された時は、何をどうすればいいのかが分からず困惑しました。多くの先生方も同じような悩みを抱えられたことと思います。だからこそ、誰でもできるプログラミング教育の研究を深めようと考え、実践しました。

まず、論理的思考を高めるための取り組みとして、パソコン内だけの活動にならないようにしました。プログラミングアプリでキャラクターを動かすために出てくるコマンド（命令）で教師や友だちを実際に動かしてみたり、パソコンのアプリ内でコマンドを使ってキャラクターを操作する前に、コマンドカードを使って、どのようなコマンドを並べればいいのかをシミュレーションしてから、実際にパソコンでキャラク

ターを動かしたりしました。アンブレグド（パソコンを使わない）な活動で体や手を動かす具体的な操作を通して、論理的思考が育むことを目指しました。

また、第5学年の算数科「円と正多角形」の単元では、ブロックを組み立てることで簡単にプログラミングを作成できるアプリを用い、正多角形を作図する学習をしました。

児童はトライ&エラー（試行錯誤）を繰り返しながら、主体的に学習を進める中で、プログラミングによって「『正確に繰り返して作業を行えること』と『一部を変えることで正多角形を作図ができること』を通して、正多角形の性質を学ぶ」ことを意識しました。プログラミングを教えるのではなく、プログラミングの良さを体験しながら、教科のねらいである多角形の性質を学び、学習を深めることができた事例です。

これまでの実践で、プログラミング学習活動を導入した授業における論理的思考の育成は確実に高まっていると感じます。トライ&エラーを繰り返しながら、課題を解決したり、作図をしたりするプログラミングの過程では、物事を順序立て論理的に

考えることが絶対に必要になるからです。このことは大きな成果の一つといえます。

プログラミング教育は、今後も様々な実践の積み重ねとさらなる普及が課題となります。現在、授業で用いているブロック型のプログラミングアプリは直感的に操作ができ、児童にとってプログラミングへ抵抗なく取り組むことができます。学習指導要領で示されているように、あらゆる教科でのプログラミング教育の実践ができるかを今後授業実践を通して、検証していくことも大きな課題といえます。そして、教師同士がその情報を共有できるような場を設け、多くの実践や情報を蓄積していくことがよりよいプログラミング教育の発展につながると思います。

今後、AIやロボットの力を借りて人間がより快適に活気に満ちた生活を送ることができる社会（Society 5.0）を生きっていく児童・生徒の情報活用能力や論理的思考をよりよく育むために、先生方と協力・情報共有しながら、更なるプログラミング教育の発展を目指していきたいと思

います。

学習指導要領では、小学校において各教科等の特質に応じて計画的に「児童がプログラミングを体験しながら、コンピュータに意図した処理を行わせるために必要な論理的思考を身に付けさせるための学習活動」を実施することが明記されています。プログラミング教育の目的は、コーディングを覚えたり、プログラミングのスキルを学んだりすることではなく、自分が意図する一連の活動を実現するために、物事を順序立てて、論理的に考えていくというプログラミング的思考を育むことにあります。これは特定の教科、単元に限定するのではなく、多様な教科、学年、単元等において実施することが望まれており、各学校がそれぞれプログラミング教育をカリキュラムマネジメントすることを求められて



# GIGAスクール構想

## オンライン授業の実践

### オンライン学習の可能性を拓く



長崎大学教育学部附属小学校

橋元良太

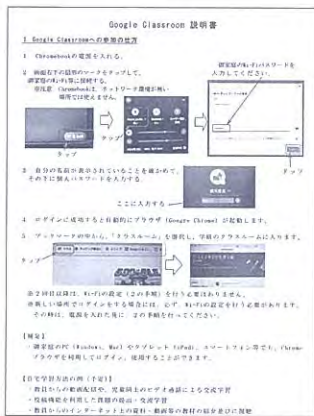
本校では、令和3年9月1日から6日までの4日間、初めてのオンライン学習を実施しました。

初のオンライン学習ということで、不安や心配も多かったのですが、この取り組みは、子どもにとっても、私たち教師にとっても、大きな学びを得る機会となり、予想以上の効果をもたらしました。

#### オンライン学習の実際

8月24日(火)オンライン学習を行うことが正式に決定しました。1週間という限られた期間の中で、私が行ったことは、主に次の3つです。

- 保護者向け文書の作成
- タブレットPC使用ルールの見直し
- 無線ルーター貸出のお知らせの作成



簡単なマニュアル

まず、保護者の協力を仰ぐために、文書とマニュアルの作成を行いました。細かい文言等については、管理職の先生方の御指導を受けながら、A3用紙1枚のリフレット形式で作成・配付しました。

次に、家庭での使用も考慮したルールの見直しを行いました。これまでのルールに加えて、家庭における充電と保管や、使用時間等に関するルールを新しく追加しました。

また、家庭にネットワーク環境が無い場合の無線ルーターの貸し出しに向けたお知らせ文書を作成し、機

器とともに、希望者に配付できる準備を行いました。

9月1日以降は、それぞれの学年の実態に応じて、国語科、算数科、理科を中心とした双方向授業と選択学習を組み合わせたオンライン学習を行いました。加えて、朝の会や帰りの会もオンラインで行うことで、子どもと教師が、毎日コミュニケーションをとることを重視して、学校とつながっている安心感をもたらすように配慮しました。

#### ICT活用の日常化を目指して

今回のオンライン学習における、最も大きな収穫は、教員と子ども双方のICT活用スキルの向上です。



オンラインでの授業の様子

オンライン学習を行うことが最善とされる状況に置かれたことで、すべての教員および子どもが、必然的にICT活用を行うこととなりました。そうすることで、教員のICT活用スキル向上につながりました。また、低学年の子どもも、家族の協力を受けながらではありませんが、PCを使った学習を展開することができたことは、大きな自信につながりました。

4日間のオンライン学習でしたが、そこから学んだことは大変多く、価値あるものでした。今回の実践を踏まえて、さらに新たな実践に挑み続けていくことで、ICT活用の可能性を拓いてまいります。



端末を使いこなす子ども

☆今回の取り組みに関わる資料は、附属小学校ホームページに掲載しております。



## オンライン授業体験記



長崎大学教育学部附属中学校

山中典希

9月初めの1週間、本校では、オンライン授業を実施した。

私も2年生の4学級で2回ずつ国語の授業を行った。単元は「用言の活用」。「読むこと」や「書くこと」、まして「話すこと・聞くこと」は、初めてのオンライン授業には手強いと感じていたから。

できるだけ普段どおりの、生徒とのやりとりのある授業にするために黒板を使った。板書しながら端末を操作できること、かつ、画面に映る文字の大きさ（昨年、校内研修でオンライン模擬授業を行った際、黒板全体を映すと、文字が小さくなり見えにくかった）を考えて端末を固定し、カメラが捉える範囲を確認して黒板に印をつけた。幅2メートル、高さ80センチほどだった。ミニホワイトボードには重要事項を書いておき、タイミングを見て提示した。「用

言の活用」では、活用表を用いた理解が不可欠だ。表と一緒に完成させる過程を大切にしたいと考え、画面に合う大きさの教具を手作りした。模造紙に表枠を書き、その上にアク

と、ホワイトボード用マーカーで書いたり消したりできる活用表が完成した。生徒にも同じ枠を印刷して渡しておいた。モニターは、生徒用の画面と36人全員の表情を同時に確認できるようにするため、2台用意した。

そして迎えた本時。meetを開いてみると、早くも入室している生徒が数人いる。カメラ越しに生徒たちと会うのは新鮮で、なんだか浮き浮きしてしまい、画面の向うとこっちでじゃんけん。「勝った人はいいことがあるですよ。」と占いのよう

なことを言ったら、互いの緊張もほぐれたようだった。時間になり、出席を確認する。画面下にカウントが出るので、すぐに

把握できた。全員入室している。

「みんなが今朝したことを教えて。さあ、どうぞ！」画面の向こうに呼びかけると、チャットがどんどん入ってくる。「パンを食べました。」

「テレビを見ました。」「勉強していいました。」……。これらを今日の題材として、動詞の活用についての学びを進めた。「大事なところだから写しておこう。」と、ホワイトボードを拡大して示したり、「みんな確認しよう。」と、教科書を指差し

ながら画面に映して一緒に見たりと、どうすれば画面の向こうに伝わるかということを意識し、アナログとデジタルの合わせ技(?)を駆使した。挙手機能を使って発表もどんどんさせた。生徒たちは順応が早い。指名

されるとマイクをオンにして、「皆さん、聞こえますか？」などと確認しながら、いつもよりゆっくり話している。さすがはITネイティブである。

面白かったのは、普段あまり発言しない生徒が積極的に発表したこと。後で尋ねたら、「周りの目が気にならなから話しやすかった。」と答えてくれた。

もう一つ話題を。生徒たちの目の

健康に配慮し、20分経ったところで3分間の休憩をとることにしていた。休憩後には、母校の千々石第一小学校で習った目の運動を伝授。腕を伸ばして人差し指を立て、「指！」の合図で指先を見つめ、「山！」の合図で普賢岳の山頂を見るといふもの。普賢岳の代わりに遠くの景色を見てもらった。

このようにして計8時間を終えた時は、正直なところほっとした。オンラインでは子どものつぶやきは聞こえないし、学びの空気感も伝わってこない。学びの実態を見取るにはやはり限界があった。

対面の授業に勝るものはないのだ。生徒も同じように感じていたことが感想からうかがえた。とはいえ、案外楽しくできたというのも率直な感想である。オンラインだからこそ活躍した生徒がいた。音楽では歌唱ができたし、英語では発音練習が気兼ねなくできた。「端末の操作に困った時に生徒が助けてくれた。」という先生も多かった。

これからも子どもたちの学びを止めないようするため更に研修を深めたい。



# わたしの教育実践

## スポンジのように



長崎市立諏訪小学校 長田 七海

「スポンジのような先生になってください。」

長崎大学附属小学校で、約1カ月間の実習を終えた大学3年生の私の胸に強く響いた言葉です。「スポンジが水を吸収するように、多くの知識や技術、経験や失敗を吸収してほしい。そして、ぎゅっと絞ると、吸収した水が出てくるように、子どもたちのために還元してほしい。」そのような願いが込められた言葉でした。その言葉を胸に、長崎大学を卒業し、赴任1年目の私は、とにかく同学年の先生の真似をしました。学級開きの方法や、懇談会の進め方、ワークシートや掲示物など、たくさんアイデアを教えてくださいました。しかし、4月の学級開きは、思うようにできませんでした。それは、子どもたちに好かれたという気持ちではなく、厳しく叱ることができずいたからです。また、子どもたちの

悪い所ばかりに目を向けてしまい、頑張っている子を褒めることが、疎かになっていました。

その反省を生かして、2年目は、先生方の子どもたちとの関わり方を教わったり、真似したりしました。

そして、嫌われる勇気を持ち、子どもたちのために、愛情をもって叱ることや、小さな成長や頑張りを見逃さず心の底から褒めること、一緒に喜ぶことの大切さを学びました。

今は、子どもたちの「いいところ」をたくさん見つけて、学級で紹介するようにしています。子どもたちには、友達への「いいところ」をたくさん知ってもらったり、気づいてもらったりして、次は自分が紹介されたいな、褒められたいなと思っほしいです。

最後に、学級や学年、学校が変われば、目の前の子どもたちも変わります。その子どもたちの5年後、10年後のために、今の私にできることは何かを考えて、これからも、「スポンジのように」たくさんのお話を吸収して、子どもたちのために謙虚に学び続ける先生でありたいです。

## 子供たちと日々を創るために



南島原市立堂崎小学校 荒木 優花

教職について3年目。日々の教育活動の中で大事にしていることは二つあります。

一つ目は、子供と信頼関係を築くことです。全ての教育活動を有効に進めるためには、信頼関係が根底に必要だからです。そのために次の2点を意識しています。

1点目は、姿で見せる。これは教育実習の時にも言われた言葉です。教師の言葉や指導に説得力をもたせるためには、やはり教師が手本にならなければなりません。その姿を継続することで、信頼と安心を与えることができます。それが学級の輪にもつながっていくと思います。

2点目は、積極的にコミュニケーションをとる。毎朝明るい挨拶から始まり、学級全員と言葉を交わし、昼休みは他学年も含めて元気いっぱい遊んでいます。髪型、表情、洋服などいつもより素敵などころを褒めたり、良い行動を褒めたりします。

勤務校は全校児童百名弱の小さな学校です。全校児童の顔と名前が分かるからこそ、みんなで遊び、みんなに声を掛けることができます。知ることは信頼を得るための第一歩。そのために話すことは、私にとって大事なツールです。

二つ目は、子供たちがお互いに学び合い、認め合うことです。学習での学び合いはもちろん、生活の中でも学び合うことがあります。自分と友だちは似ているところもあれば、遊び方・考え方・感じ方など違うところもあります。違いに気づき、受け止め、友達の良いところを吸収して欲しいと思っています。

その学び合いは、認め合いにもつながります。私は、子供たち自身に目標をもたせ、時に語り、ふり返りを行わせることで、学び合いにつなげるようにしています。少しでも子供たちに伝わるように毎日子供にも自分にも向き合っています。

子供の様々な姿を受け止め、寄り添い、半歩でも一歩でも子供たちが成長できるように、これからも私自身が学び続ける人でありたいです。



# クラス一丸となって



平戸市立平戸中学校 中 村 ひな子

り遂げることで達成感や充実感を味わい、さらにクラスへの安心感や所属感にもつながると考えます。

また、教科指導においては、班活動を取り入れて協働的な学びを心がけています。

ある社会的事象に対して班の中で意見交換をしたり、解決策を考えたりする活動を通して、身の回りに起こる様々な事象への興味・関心が高まるよう意識しています。

社会科が得意・不得意な生徒はそれぞれいます。しかし、みんなで意見を出し合うと解決の糸口が見えたり、新たな視点を得たりと、日々の授業においても「クラス一丸となって」取り組むことで、クラスメイトの考えを大切にし、共に学ぶ姿勢につながると考えます。

教師としてまだ未熟で、わからないことだらけで手探りの毎日です。しかし、私自身も生徒と共に「クラス一丸となって」、何事も一生懸命に取り組み、成長をしていきたいです。

私が生徒たちと関わるにあたって大切に行っていることは、何事にも「クラス一丸となって」取り組むことです。3年生にとって中学校最後の思い出となる行事を、クラスみんなで目標を持ち、協力し合い、助け合いながら取り組むことが大切だと考えるからです。それぞれの行事ごとにリーダーを決め、リーダーを中心にクラス全体で「気持ちをつなぐ」ということを意識して、みんなで練習したり、なにか困ったことがあれば生徒同士で助けたりします。このようにクラス全体で行事をや

# 振り返り、意味をもった働きかけ



五島市立福江中学校 平 田 千 佳

教員になり3年目。少しずつ仕事にも慣れてきた今年度、初めての特別支援学級担任、初めての専門外の部活動顧問を担当させてもらうことになりました。毎日がこれまで経験したことのないことの連続で、うまくいかず反省の日々。部活動はソフトテニスのルールもわからず、とりあえずラケットを購入し生徒と一緒に練習することから始めました。これまでとは違う立場に立ったことで、この立場になってみないとわからないことや、今まで見えていなかったものに気づかされました。

「言うことを聞かせようと思っても聞かん。逆に聞きたくなるような自分になることが大切。」一人一人、特性の異なる6人の生徒たち。毎日ながらもぐらたきたき状態で、なぜうまく伝わらないのだろうか?と生徒を叱ってばかりだった年度始め。ある時、校長先生にかけていただいたこの言葉にハッとさせられました。「自分の支援は適切だった?言葉のチョイスは?声掛けのタイミングは?本

当にあれで良かった?…」目の前の6人にはもちろん、去年や一昨年の支援学級の生徒への配慮不足を後悔し、申し訳ない気持ちになりました。それから「常に自分の支援を振り返ること」、「一つ一つの働きかけに意味をもたせること」を意識し、試行錯誤しながら支援を行っています。少しずつですが一人一人に適した支援のパターンが掴めるようになり、生徒にうまく伝わるが増えてきました。同時に、生徒たちができることも少しずつ増え、ほんの小さな成長が今までのキツさも忘れさせるほど、とっても嬉しいのです。

この一年は、戸惑いも喜びもたくさんありました。生徒との関わりがうまくいかずに悩んだこと、生徒の成長の場面にたくさん立ち会えたこと、チームの成長を感じ、中総体・新人戦共に優勝の瞬間に立ち会えたこと…。その全てが私にとって間違いなく貴重な経験となり、自身自身の成長の糧となりました。

この3年目での多くの学びに感謝したいです。これからも、今年学んだ「常に自分を振り返り、意味をもった働きかけ」を大切に、先輩の先生方に助言を頂きながら、目の前の生徒たちと全力で関わっていききたいです。



# あの人は、今……

## 初任の先生方と

福岡市早良区 日高 清憲

(昭和58年3月卒)



大学を卒業し、勤務地を福岡市内の小学校に求め38年が過ぎました。つい昨日のこのように大学生生活のことが蘇ってきます。今回ご縁あって同窓会誌に寄稿させていただきますことになりました。

現在は、再任用で初任研拠点校指導教員として3校6名の初任の先生方の学級をまわる日々にあります。期せずして授業や学級というものについて考える時間を持ったことができています。初任の先生方の奮闘する姿にこれまでの己のいい加減さを気づかされることしばしばです。

担任を持つ上で少なからずの困難はつきものですが、それを乗り越え、

矛盾を受け止めながらもより良いところへと進むうとする姿があります。ここでは、学年をはじめとした同僚の先生方の支えが大きく効いていました。支えは、厳しい指摘から心情的な寄り添いまで様々でした。教師は、職場の中で育つのだと再認識させてもらいました。

間もなく学校の一年のサイクルが終わります。4月の学級開きからこれまでの道のりの一端に立ち会ってきましたが、私の知らないところでそれぞれの先生が積み重ねていたであろうことを思います。得手不得手、指向する方向、抱えるものは異なる6人ですが、それぞれに受け持つ学級をここまで作り引っ張ってきたことに対し率直に敬意を抱きます。

昨年度末で退職、しかし翌日から再任用としてそれまでと変わらぬ勤務時間の中での日々。スツキリ仕事から区切りを付けたいという気持ちなどがどこかにあります。ただ、それ以上に次を担う世代の成長のすぐそばに居合わせてもらいたい、一緒に眉をひそめたり喜んだりすることの方が今の私には大切なようです。もうしばらくは、学校教育の世界に居させてもらおうと考えているところです。

## 社会人も悪くない

佐世保市日宇町 西村菜南子

(平成31年3月卒)

大学生の時、「今が人生で一番楽しい時期なんだろうな」と、漠然と思っていました。それは大学生活が言葉にできないほど楽しかったからということもありますが、社会人になることへの不安が大きかったからです。

社会人になれば自由な時間は無くなるし、学生よりは重い責任を負わなくてはいけないだろうし、「やっつけられないなあ。」と将来憂鬱さを感じて、友人とくだを巻くことが何度あったことか。

しかし社会人になった今、「いや、今も悪くないんじゃないか？」と私は思うようになりました。

私は教職ではなく、一般企業に就職しました。一般企業に就職して、今のところ毎日楽しく充実に生きています。感じて

仕事を終えて、自分でご飯を作ってお風呂に入り、明日に備えてゆっくり寝る。休みの日には、ちよっと遠出して、良い景色を見に行く。自分で稼いだお金で、欲しかったアイ

ドルのCDを何枚も買う。普段、仕事で会えないからこそ、たまに会う友人のありがたみを感じる事が出来る。「休みの日が終わってほしくない」と心底願う。手の凝った料理に感動するエトセトラ。

もちろん、仕事に日々向き合っていく中で、落ち込むこともたくさんあります。「自分はなんてちっぽけな存在なんだ！」と、一日ベッドの中でじっとしていたいと、泣きたいこともあります。でもそんな感情の揺れ幅があってもいいじゃないか、と思えるのです。この感情の揺れ幅こそが、日々懸命に生きていく実感だと思えます。

今、大学生生活を謳歌している皆様に伝えたい。「社会人も悪くない」人生をどうするかは、全て自分次第です。

共に強く生きていこう！





# 母校だより

藤本 登

## 不易と流行

長崎大学教育学部長 藤本 登



今年度も残り僅かになり、今年の学部を少し振り返りたいと思う。多くの人に印象深い出来事は、附属小・中学校で行われた夏休み明けから九月六日までの一週間のオンライン授業であるうか。第五波のコロナ禍とはいえ、生徒指導上、また教育実習の開始という大事な時期に、附属学校の先生方は一週間で保護者対応から児童生徒への指導、授業、教育実習生への指導等の準備をされた。乗り切れた最大のポイントには、関係者の理解と日頃から授業で端末を積極的に利用していた（小学校の低学年を除いて）ことによる。実のところ、八月二十日に大学から指示が

出され、二三日までの間に実施期間や方法、終了の判断や家庭や周囲への影響等を感染症の専門家や周囲への影響を附属校園長と協議・決定できたのは、附属教員の実力があつたからである。詳しくは年度内に完成する報告書を参考にされたい。

他に嬉しいニュースとして、峰松和夫教授が工学部と共にパーテイション（実用新案3334982号）を開発し地場企業が製品化、兼原啓二准教授が彫塑「蝕まれたト・ル・ソ」で第六六回県展西望平和賞を受賞、附属中学校卒業生の永瀬貴規さんが東京オリンピック柔道八キロ級で金メダルを獲得し附属中学校の生徒と交流したこと、その他にも附属小学校の児童の海岸のゴミ拾い、附中生のリレーや駅伝での活躍、学部生の若者の地場企業就職支援会社（パルフラッグス）の設立などがある。附属学校の子ども達、学生、教員、卒業生等が活躍することは後進に大変励みになるもので、また嬉しい限りである。日頃から皆が努力をした結果の一部が垣間見えた瞬間である。また、古賀雅夫名誉教授、相川勝代名誉教授が叙勲を受賞された。心からお祝い申

し上げる。一方で当然のことながら残念なニュースもあるが、それはそっと心に留めおく。

さて、これからの学校には、高度情報化社会に対応した教育のみならず、学習者である子ども達、教員や地域社会にも幸福な場として維持されること が求められる。所謂、Well-being な学びの場づくりである。そのような意味で長崎県内の社会教育活動を紹介した江頭昭文氏の『「つながり」で目指す持続可能なふるさとづくり』には多くのヒントが隠されている。また、

十二月に長崎県で開催された第五一回九州ブロック社会教育研究会長崎大会では宇久高校の実践発表など子どもから高齢者までもが学び合うことの意味が議論されていた。開催方法や参加者のユニークさも際立っていたと思うが、これに携わった県生涯学習課を中心とした県内関係者の熱意が感じられ、頼もしい限りであった。このような活動を通してふと思うことは、私が教職大学院の管理職養成コースの立ち上げにかかわっていたころに意識した「教育の不易と流行」の大切さである。長崎県が脈々と受け継いできた教育・教師教育という不易の部分を如何に紡いでいくか、またGIGAスクールをはじめとする新しい学びの手立てや環境問題をはじめとする自身が加害者でもあり被害者でもある問題を解決するための資質・能力の育成といった流行の部

分を学部・教職大学院・附属学校での教員の養成・研修内容として如何に取り込み、練り上げていくか、悩ましい限りである。これを解決するヒントは、学部・教職大学院で取り組んでいる実務家教員と研究者教員のチームティーチング（例えば教職大学院では20・8%）による講義や協働研究活動にある。今後、これをさらに発展させること、教育界のトップで培われた教育観を戦略的に学生に伝える仕組みを作ることが必要であろう。

一月からは次年度向けの教採特講が就職委員会、実務家教員、玉園同窓会等の協力により始まる。本年度の教員採用選考試験の結果は、高い募集枠による気持ちの緩みが影響した校種も見られたが、概ね昨年度並みになった。一月には木村国広教授と長谷川哲朗教授による三年生向けのキャリアガイダンスが実施されたが、参加者が少なく残念であった。まだ学部、大学院全体がチームになり切れていないと実感した次第である。二年後には教育学部創立百五十周年を迎える。次の時代を見据えた新しい教育学部の創設を内外から求められている。諸先輩方から、忌憚のないご意見・ご支援を頂ければと思う。

最後に、オミクロン株の流行によりコロナ禍の拡大が懸念されている。皆様、御無事で御活躍されること祈念する。



## 公益目的事業の募集

長崎大学同窓会は、一般社団法人として長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的としての活動を行っています。

この目的を達成するための事業として、長崎県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に対する図書購入の助成、及び長崎県内の児童・青少年育成を目的とする事業への助成を行っています。令和4年度も下記の要領で募集を行いますので、周知のうえで応募ください。

### 図書購入費助成事業

- 1 助成校 小学校・中学校・高等学校・特別支援学校
- 2 助成額 1校につき7万円未満
- 3 募集期間 令和4年3月1日～6月30日
- 4 応募手続き
  - ① 応募希望の学校は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
  - ② 応募した学校へ「募集要項」を送付する。
  - ③ 学校は、「申込書」に、「購入図書計画書」を添えて提出する。
  - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した学校に通知する。



(雲仙市立愛野小学校)

### 児童・青少年健全育成助成事業

- 1 助成の対象となる事業
  - ① 児童及び青少年が参加して行う体験活動・発表会・展示会・伝統文化の継承・社会貢献などの実践活動
  - ② 健全育成を目的として実施する、保護者・地域の指導者等の研修、学習活動
- 2 助成額 1件当たり5万円を上限として、総額20万円の範囲内で、対象とする事業の必要経費の概ね2分の1を限度とする。
- 3 募集期間 令和4年4月1日～6月30日
- 4 応募手続き
  - ① 応募希望の団体は、電話（095-824-5494）で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する。
  - ② 応募した団体へ「募集要項」を送付する。
  - ③ 希望する団体は、「申込書」に「実施計画書」を添えて提出する。
  - ④ 選考委員会による選考後、「決定通知」を応募した団体に通知する。
  - ⑤ 助成を受けた団体は、事業実施後、「実施報告書」を提出する。

## 一 事 一 務 一 局 一 よ 一 り

ともに 終身会員として

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしく願いいたします。

(1) 入会金 5,000円(終身にわたって、会報を送付します)

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡してください。すぐお届けいたします。

TEL 095-824-1549

### ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や公益目的事業について、会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。そこでホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思いますので皆様の御活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>

メールアドレス [nu-tamazono@mx.b.cncm.ne.jp](mailto:nu-tamazono@mx.b.cncm.ne.jp)